大宮における動線変化による地域住民交流の場の創出
～COVID-19 影響後の大宮駅東口地区の提案～

都市空間生成研究室
1741175　　山本　貴大

大宮　　駅前再開発事業　　まちづくり
路地空間　　ポストコロナ　　サードプレイス

1.　研究の目的と背景

現在埼玉県さいたま市大宮では、東日本の結節点、交流拠点として東日本からの集結・交流を高めていく事が求められている。40 年弱開発が進んでいなかった東口駅前が急激に変化する節目に直面している。少子高齢化や人口減少といった社会問題、ポストコロナによる人々の生活様式の変化などを考慮した際、現在の再開発事業で変化に対応する事は可能であるのか。交通機能が高いことから注目を浴び始めている大宮での開発事業は今後の住民の生活にも大きく影響を与えるためポストコロナを考慮した開発の在り方が必要なのではないかと予想される。

本計画は、大宮駅東口駅前空間にビルを林立しオフィスや商業施設を導入して活気を創出するのではなく、現状の低密度な空間だからこそ可能なデザインを導入する事で大宮に交通の便益だけでない留まる価値、交流の価値を新たに創出し大宮駅グランドセントラルステーション化構想の代替案を提案する事が目的である。

2. 大宮の地域特性

2-1. 大宮の歴史的変遷

大宮はかつて宿場町、鉄道の街、製糸の街、商業の街として発展を遂げてきた。大宮駅前での商業の中心の始まりは東口であったが、1980 年代に新幹線開通の際に東西で開発の進展に違いが生まれ西口では整備が進んだが東口では整備がされず、次第に西口が商業の中心となる。

現在では東西駅前共に新たな再開発事業が進行しており駅前空間が整備される節目を迎えている。

2-2. 大宮駅再開発事業

東口
・大宮駅東口大門町 2 丁目中地区市街地再開発
・大宮駅グランドセントラルステーション化構想
西口
・大宮駅西口第三地区再開発事業
・大宮駅西口第 3-B 地区再開発
・大宮駅西口第 3-A・D 地区再開発

現在大宮駅前再開発事業は 4 つの事業が進行、計画が行われている。本計画では、大宮駅グランドセントラルステーション化構想以外の 3 つの再開発事業は前提条件としている。

2-3. 大宮駅グランドセントラルステーション化構想の課題

① オフィスの過剰供給
東口駅前にビルを林立した際にオフィス床が過剰供給され、ポストコロナを考慮した際ただオフィス床を増やすだけでは対応が出来ない。
② 周辺地域には緑が多いが駅前は少ない
徒歩 10 分ほどの場所には緑が多く大宮公園や氷川神社もあり自然に囲まれた場所になるが駅前を訪れた際大宮に緑が溢れているとは感じられる状況ではない

2-4. 現状分析と課題

① 駅前広場機能
大宮駅東口駅前広場は交通機能が駅前に集積していることから、駅前広場の留まる場所が少なく、広場としての役割を担っていない。
② 曜日や時間帯による賑わいの差
駅前路地空間にひしめく飲食店の数々は大宮駅前の魅力であるが、平日と休日、昼間と夜間で賑わいの差が大きい。
③ コロナによる大学生の学びの場の減少
コロナウィルスにより大学で直接学ぶ機会が減少してしまっている。オンライン授業を自宅で受けているだけでは人とのコミュニケーションも少なく本来の学習形態ではない。その代替えとなる新しい学び環境の受け皿が必要である。

3.　計画内容

3-1. 計画コンセプト

本計画は、整備された西口と違い長年開発が進まずにいる大宮駅東口駅前低密度な空間で、人の動線の変化により地域住民の交流の場を創出する事を計画コンセプトとする。
・滞在時間を増加させる場を造る
・飲食店だけではない食事可能空間

・学ぶ拠点を造る事で多世代の垣根を越えた交流空間

コロナウィルスにより人々の生活様式が変化した中で、人々の動線を変化する事で大宮駅前に人を留め新たな活気や賑わいの生まれる空間を創出する。

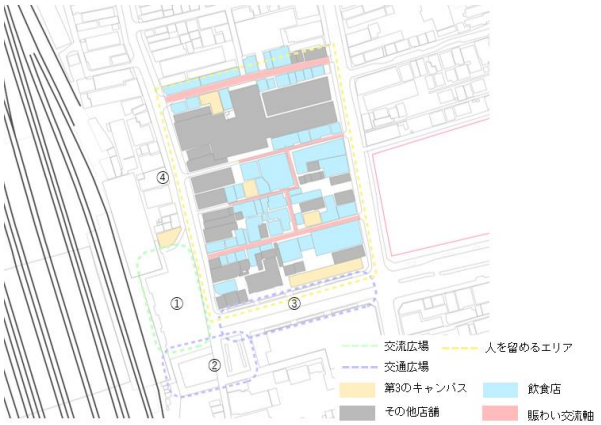

図 1　計画全体図

動線計画

図 2 人の動線変化

人の動線の変化として、「駅前滞在時間の増加」「留まり場を経由し店舗間の繋がりの創出」「地域住民の活動拠点」へと繋げていく。駅前広場の整備、第 3 のキャンパスの導入により、まずは大宮駅東口駅前に人を留め滞在時間の増加をさせる。次に、店舗間の動線が薄い状況を第 3 のキャンパスを経由場所とし多店舗へと動線を繋げる。最終的には、第 3 のキャンパスを経由せずとも店舗間の動線を繋げる事へと繋げる。

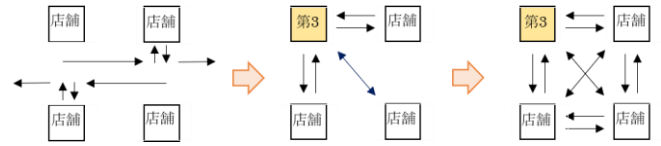

図 3 人の動線変化詳細

3-2. 計画詳細

① 人の動線を留めるプログラム

大宮を利用する地域住民や訪問者は現状長時間の滞在をする事はなく、多世代にわたる交流が駅前広場で生まれる機会もない。駅前広場を真の駅前広場とし、駅前に留まる事の出来る場。更には数少なくなってきている路上ライブを地域の交流機会として駅前に休憩所兼屋外舞台の設置、また大宮駅側面を活用したスポーツ観戦などのパブリックビューイングスペースとして活用する事で、駅前利用者の行動拠点となる場所が必要になる。

② 昼夜間共に活気が生まれるプログラム

金曜日夜、休日の昼夜を除く平日の昼間の賑わいが駅前路地区間の店舗構成から飲食店(飲み屋)が多い事もあり少ない。第 3 のキャンパスとして、ポストコロナやウィズコロナの状況下の中で会社や学校、自宅ではないサードプレイスが必要となる。学びの場は学校、仕事の場は会社ではなく仕事をしながら学べる場、学びながら仕事が出来る場がある事で学生、社会人、高齢者が各々の持っている知識や体験が世代を問わずに共有する事が出来、ただ会社に行って仕事や学校に行って学ぶ、自宅でゆっくりと趣味の時間を過ごしていた時では書く場所で完結してしまっていた事が、第 3 のキャンパスを通じて地域の交流がうまれ、昼間から駅前を訪れる事が増加する事が可能になる。

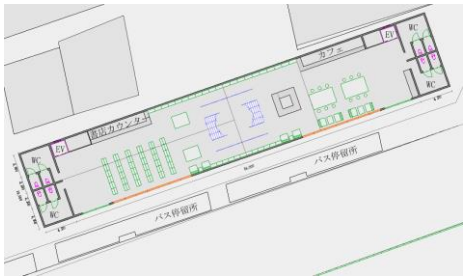

図 4 第 3 のキャンパス 1 階部分平面図

図 5 第 3 のキャンパスイメージパース

参考文献

1) 大宮駅東口大門町 2 丁目中地区市街地再開発事業概要, さいたま市 HP
2) 大宮駅グランドセントラル ステーション化構想概要, さいたま市 HP
3) 大宮駅西口第 3 地区再開発事業概要, さいたま市 HP
4) 文部科学省調査
5) Think with Google, Google 調査分析情報ブログ